

シリーズ「下肢静脈瘤」②

下肢静脈瘤の画像診断法

国立病院機構和歌山病院

放射線科 夏目久司

像処理によりフィルムを使った撮影よりも静脈全体像の描出が容易で異常を見つけ易くなりました。複雑な静脈瘤の形状把握や再発の診断にも有用です。

下肢静脈瘤とは足の血管(静脈)の弁が壊れて血液が逆流することで、静脈の血管が拡張して瘤(こぶ)・網目・クモの巣状に浮き上がる病気です。外来での視診である程度まで診断可能ですが、その病態を正確に把握するために下肢静脈造影検査・静脈造影CT検査・超音波検査・MRI検査等で静脈の閉塞の有無や逆流の部位を調べます。今回は、下肢静脈の全体像が見られる点や正確な位置情報を確認できる点で優れている下肢静脈造影検査と静脈造影CT検査を紹介します。

下肢静脈瘤をX線撮影で検査する場合、通常のX線撮影では血管の形状が分からないので造影剤(X線が通り難い薬)を用いた下肢静脈造影検査

CT装置を使った静脈造影検査では、下肢全体にわたる静脈の3D画像の描出により全体像の把握をして、深部静脈内の血栓の有無を確認するのに用います。さらに下肢の静脈造影CTに引き続き胸部を撮影することで肺血栓塞栓症の診断にも有用です。静脈造影CTは術前検査や術後の経過観察に重要な役割を占めています。

最後にりましたが、下肢静脈瘤は全く痛みを伴わないこともあり放っておくと病状は進行し、潰瘍ができて皮膚の一部が欠損する恐れもあります。また、深部静脈にできた血栓が剥がれて、静脈内を流れ肺動脈が詰まると、肺血栓塞栓症で命を落とす危険さえあります。静脈瘤かなと思ったから一度専門医に相談してみましよう。